

地域サービス活動の一断面

— 児童福祉活動過程

及び学生の指導を通じて—

田 宮 良 子
吉 沢 英 子

はじめに

戦後、各地区に社会福祉協議会（以下社協と記す）が組織され、その活動が未だ充分とは云えぬが、種々の面に働きかけて効果をあげ、その成功せる活動のリポートが多くみられるようになった。全社協資料第二一輯によれば、取上げやすい活動に児童福祉があげられている。しかし地域の人々の児童に関するニードは、強く表面化していない。即ち潜在的ニードとして、活動がはじめられ、その効果を經驗することが出来ると、非常に強く表面化したニードとして表われてくるのである。従つて、活動をしようとする側にとつても容易に活動出来、その効果が多少とも見られる事によつて、地域の人々との結付きも相互に導入されうるといふ事が云えよう。

以上述べた点について、日本女子大学社会福祉学科に於ける地域サービス活動としての子供の活動過程にも、見られる事実である。

この子供会は、大学が地域へのサービスを目的とし、特に児童（小学校一年～六年の学童及び幼児）の余暇善用の援助をするべく、学生がこの援助者となつて活動が一九五二年五月よりはじめられたのである。ここに子供会の内容を紹介すると同時に、学生の子供会に対する活動過程に重点をおき述べてみたいと思う。又、実際に活動に當つている学生間の問題、組織、他の学生との関係、等をも含め、且つ今後のあり方にも触れてみたい。現在までに場所の開拓、地域の選択等に大きな努力がはらわれた。その地域による子供会の内容の差があるというのは、児童のプログラム内容に対する反応、児童間の交流から湧出する雰囲気によるものである。こうした動きをよく捉えて児童に如何に接したらよいかを、常に援助に当る者が心得ていなければならない。故に児童取扱いに関する研究会をつたり、内容検討会をつたりしているのである。要するにその地域との密接な関係を持ち、更に参加する児童達のニードに満足を与える、と同時にその地域の協力をたくす得られる様に運営し

て行かなければならないと思う。

こうした活動の類型を考えてみると (1)地域の大人が主体となつて児童に与えようとする型、(2)地域の児童のみのニードから、児童のみで組織しようとする型、(3)児童のニードと地域の大人の児童の福祉に対するニードが相互に結合して活動をなそうとする型、に大別出来る。しかし、この類型の相互に地域の場合、児童のニードの変化に伴つて適当に関連を保つていかなければならない。

準備過程

I 臨地調査

先ず児童に接する手段として学生有志が、紙芝居を持ち、その地域に浸出し、④児童の反応、興味的一端を知る。⑤一方その地区内対象児童の路上での遊びを観察し、その児童からその地区内に来る街頭紙芝居の時間を聞き、日に何回くるかを調べる。⑥その地区内に存在する類似活動の状況を知り、警察、区役所、学校、遊園地、寺院等公共施設、婦人会、防犯協会の関連を調べ、小学校の校外活動の範囲、小学校側の地域活動に対しての希望等を聴取する。⑦他方地区の親としての児童に対する関心度を聴取し、親の傾向即ち教育に対して如何であるかの意見を調査する。⑧インタビューによる以上の調査から、地区としての生活環境、経済的状況、等を捉え、区役所出張所に於て児童の性別、年齢別概数をしらべておく。⑨その地区内の有力者、及び本学の卒業生の所在を調査し、訪問して意見を求め、且つ、実施に当つての協力を得るべく依頼する。

こうした調査の結果、検討会を開き、活動を開始すべく、ある程度児童を収容出来る広さをもつ場所を選定し、その交渉に当る。

一九五二年第一実施地選定に当つては、戦後焼失以来、幼稚園、保育所、その他児童に関する施設が近隣になく、工場地帯の一角であるために、その下受内職が行われている地区としてT地区を決定した。実施場所としてはN寺院に交渉、理解ある住職によつて快諾を受けたのである。

II 実施に当つての準備

④資材Ⅱ紙芝居舞台、紙芝居台本、人形劇台本、ゲーム、集団遊戯に関する著書、童話の本、歌の本、等

⑤人材Ⅱ実際の活動に常時当る責任者、人形劇をする者、劇指導者、読書指導者、記録及び報道の役をつとめる者、

何れも児童に対し興味をもち、共に楽しむ事の出来る学生有志を募る。尚本学科に於ける現場実習の課程にも、採用されるといふ条件が当該学年次の学生のみに与えられた。

第一表

実施 課程	現場 実習	以外
1952年度	3	5
1953年度	5	13
1954年度	2	1
1955年度	0	14

第一表の如く、現場実習課程として認めた学生も若干あつた。

この活動の責任者として、研究室より若干がこれに当つている。

⑥打合わせ協議会

臨地調査の結果を基にして、実際の実施内容、及び方針について話し合い、具体的なプログラムを決定する。しかし、試験的に行な

つた結果により臨機応変にプログラムの内容変化がみられるように融通性を持たしておくのである。常時のプログラム内容は、参加児童と共に組んで行くべく考慮せねばならない。この際に、学生間に種々の意見が出される。それらをまとめ、その会での学生個々の立

場も考え合わせて意見を取上げたり或いは、他の意見との結付きを考え合わせて、援助に当る学生相互のチームワークをも考慮して行かねばならない。

実施過程 — 其の一 —

I 児童を集めた方法

臨地調査の結果に基づき、プログラムを組み学校の帰途につく児童に呼びかける。友達を誘ってくる様に口伝し、よく母親にも了解を得てくる様に話しかけたのが第一回のT地区の場合である。又他の乙地区の場合は、会場を教会に求めた関係上、日曜学校に集まる児童に、会の主旨をプリントした用紙を配布し、且つ、その場を中心とする徒歩（児童の足で）十分以内の各戸毎のポストに投函した。N地区の場合は、その地区の婦人会を通じて、会の目的を各々連絡し、婦人会の活動との結びつき、即ち地域の婦人との関係を児童に接する前にはかり、委員制を用いて行なつたのである。これらの三方法で最も効果があつたのは、どの方法が考えてみる時に、何れも一長一短で、その地域的生活条件、親の関心の持ち方によつて、配慮されなければならないという事が云いうる。直接児童に接し、そのニードを明確につかむ方法は、T地区の如き工場地帯で且つ、内職などを行なっている家庭の多い地区では、非常に結びつきが密接になり、活動しやすく、その効果も母親をして強く体験せしめる様に思われる。

II 対象児童について

第一回集会がなされた時、集まつた児童の年齢層が広範囲にわたつていた為に、これを児童部、幼児部に分け、更に児童部は学年別

に三グループに分けたのである。最も多い一二七名の会員数にのぼつた場合の一例を示すと第二表の通りである。これを男女別にみると、上級学年に於て男児が女児の約半数以下の割合である。これは援助に当る者が女性ばかりである事に原因しているのではない。例えば小学校五、六年の上級の男児は、参加してみたいが「何となく恥しい」という様な感情が働いて参加しにくい。会の活動を遠まわりに見ながら、誘うと逃げて了うという事実がある。他面、プログラム内容にもそれらの児童を受入れるために欠陥があるのかもしれない。この様な広範囲にわたる活動を通してプログラム内容の統一に困難な点が多々あつた事から、乙地区では、試験的に対象児童

第二表

		男		女	
		名	名	名	名
幼 児	1年	24	28	5	4
	2年	6	5	8	9
学 童	3年	8	6	4	5
	4年	4	2	2	16
	5年	2	5	5	16
	6年	5	16	5	16
計	幼児	24	28	24	28
	学童	30	45	30	45

に活動をなさせる側としても扱いやすかつたのである。しかし児童相互には、変化がうすく、学校の延長の如き感をまぬかれぬふしも見受けられたのである。N地区は、戦後の集団住宅地区で、又学童六学年にわたつて対象としている。人員もその地域、月々によつて多少の動きはあつたが回を重ねる毎に固定化し、参加児童のメンバーの顔ぶれが決まつてくる。又集まる児童の年齢分布及び人員は、時間的關係によつても左右されるのである。現在N地区に於ては、一年から三年の間の児童が主なメンバーを占めている。

III プログラム内容及び作成に關して

に小学校三年以上とした。又人員の点も、活動しやすい三〇名〜五〇名と限定したその結果、非常に活動しやすかつたのである。しかし児童相互には、変化がうすく、学校の延長の如き感をまぬかれぬふしも見受けられたのである。N地区は、戦後の集団住宅地区で、又学童六学年にわたつて対象としている。人員もその地域、月々によつて多少の動きはあつたが回を重ねる毎に固定化し、参加児童のメンバーの顔ぶれが決まつてくる。又集まる児童の年齢分布及び人員は、時間的關係によつても左右されるのである。現在N地区に於ては、一年から三年の間の児童が主なメンバーを占めている。

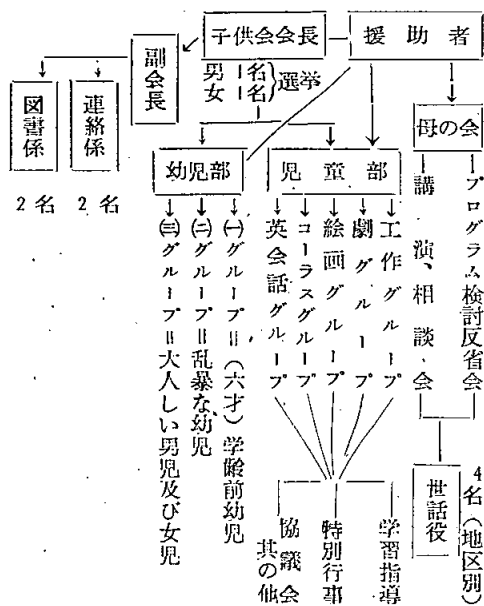
幼稚園	項目	遊戯 話又 紙芝居	歌 工作又 園工
児部	内容分類別	レクリエーシヨンの レクレエシヨンの	教養的 生産的
児部	項目	学習指導 紙芝居又 はゲームス	各部に別れた活動 協議会
童部	内容分類別	レクリエーシヨンの レクレエシヨンの	生産的、奉仕的 生産的

に應じ、児童のニードに應じて考慮していく。地区によつては特にレクリエーション的要素の内容のみに限つて行う場合もあつた。常に対象児童及びその母親に刷物を配布し会に於ては意見を聴取し、又援助に當る学生間の検討により、或いは真剣に児童代表との会をもつて一カ月分位のプログラム及びその月の目標もきめ、それらによつてよりよく作成される。幼児部の活動については、自主的活動はのぞめず、主として、援助者から与える前述した活動の①の型態によるものである。児童部に於ては、グループワークの手段によつて、児童の相互關係を深め、グループの發展と共に、個々の児童の成長をも見出す事が出来る。例えば、協議会でグループの名称をつけるとか、児童間の組織の問題、運営してゆく上の規則等の決定に於て協議し、それが各自の参加によつて、楽しさの中にきめられてゆく。児童自身によつて決めた事項に対しては、相互に責任をもつた行動をなす結果が明確に表われてくるのである。援助者（学生）は、児童の各個の意見を上手に取上げ、建設的方向へ協議が進展し

てゆくべく、時には提案を投げかける様にしなければならない。これは児童をしてグループの経験を得さしめる一手段とも云えよう。

奉仕的な要素を含む内容として、その地域の清掃に主点を注ぎ、自らその活動に喜びを持たしめるべく、終了後の慰い、ゲーム等を樂しむ、清掃の結果が、経験をとおして、又その後の児童自身の活動に価値を見出せる様にしている。特別行事例えば、新年会——羽根つき大会、写生会、遠足会、等季節により、或いは地域の行事と調整を促しつつ、催しているが、他方母親の会、或いは婦人会に経過報告及びプログラムについて、検討の機会をもつて、協力依頼もかね、関心を深める様にしてゐる。

IV 児童の組織及び相互関係



ここに示した組織図は、T地区で試みた一例にすぎないが、各グループ別の活動に分れる際、活動の内容についても、児童及び母親の要望を充分に取入れ、活動しはじめたのである。児童部は、主に興味によつて活動をし児童自身のニードが反映しているといえる。各グループの創作による成果を年中特別行事即ち、年忘れ会クリスマス会に発表の機会を与え、地域の大人、母親の観覧を求めたのである。

出来上つた作品が、たとえ不出来であつたとしても、そこまでまとめあげた過程が、体験として尊いのであり、協同の結果を通して、チームワークの効果を味わせる事が大切である。

ここに相互関係の具体的な例を紹介してみたい。工作グループの或る子が図書の本箱の代りにみかん箱を使用していたのに気付き、それをきれいなにしたいと協議会でもらした。それに対して図書係から工作グループでつくつたらどうかとの意見が出た。皆一せいに賛意を示し、つくられる事に決定、援助者は、この児童の意見を早速に取入れ、次回に用意する材料について話し合つた。カンナ、カナヅチ等必要な道具を次回にそれぞれ持参して集まつた。そこで援助者は、そのグループの児童と共に近くの材木小売店に行き、児童に見積らせて材料及び、ペンキも求めて帰り、すぐ行動に移つた。ペンキの色を決める際には、議論百出、ペンキ屋の主人も、何時の間にか、その児童の会話の中にとけ込み、多数決で決定して買求めてきた。その時々には、グループ内での個々の児童の動きがよく観察出来、且つ、地域の商店人との関係も自然に結付を児童を通して円滑にする事が出来たのである。

V 子供会活動の地域に与えた影響

(イ) 会員児童に関して

○街頭紙芝居に対する関心が、多少薄くなつた。(母親の言より)

○グループ内での児童各自の立場を自覚し、協調しあう様になつた。

(ロ) 児童の親に関して

○母の会を通じ、自分の子供を通して児童福祉一般に関心をもち様になつた。

○母親同志の結付が、芽生えた。

(ハ) 地域に関して、

T地区の如きは、或る意味での刺激になつて、近くに塾の発生をみた。

VI 母の会について

児童に接する援助者にとつて、児童のグループ内での動きなどから、密接な連絡をとり児童を各面から理解し、母親の協力を求め乍ら同時に、婦人会の児童に対する理解を深める意味で結成されたのである。前述の児童と共にプログラム内容を決める態度と同様に、母親のニードに基づき、プログラムをたてたのである。その主な内容は、経過報告、子供会及び母の会の在り方について、設備の爲の相談会等である。学習指導をする上での机不足の問題から内職に用うる台、裁ち板等の使用を申出たり或いは、誰々の家にある折たたみの机が便利だから、交渉してみろという申出があつたり、児童の問題を通じて、地域の連帯観念の芽生えがみられる様になつた。又子供の饑に關する講演会を開いてほしいという希望があり、本学科の講師に依頼し、親しく話し合う機会をもつた。

こうして母の会と地域の他の人々との関係、援助者との関係、大
学との関係をもち、相互に理解を深めた様に思われるのである。

実施過程 — 其の二 —

其の一に於て、紙面の都合上、ごく簡単に、子供会活動の内容を
紹介したが、この活動内の援助者の役を果している学生間の動き、
組織について述べたいと思う。活動に当る学生の性格の相異があつ
て、或る学年では、援助に当る学生が中心となつて、その属してい
る級に働きかけ、小額紙幣の寄附箱をつくり、積極的な協力を集め
たりした。この動きは、本学自治活動にまでも結びつき、自治活動
の中の福祉係の予算から、子供会の為に寄附行為を示したり、又、
他の場合は実際をしている学生のみに限り、その中の組織をがつ
ちり組んで活動をする学年もあつた。これに対しては、自由にその
任に当る学生にまかせている。学生がそれなりに学生グループのメ
ンバーで機能別分担を行なつたり、独自の立場にたつて、一つの地
域活動を操つてゆく為の組織を考え、試みる過程に深い意義がある
事を、この活動を通して四年間学生に接していた事から云い得よ
う。その指導というよりも、学生グループの一員となつて少くとも
よき関係を保ち得る様に努力してきた筆者は、学生のグループが地
域の児童達に接する態度と同様に、学生メンバーの個々に理解を深
め、グループ間の相互関係から、更にグループとして、学生個人と
しての成長発展を経験を通じて願つてきたのである。

I 活動を通して学生に与えた影響及び評価

(1) 既成の組織の中に活動開始するのでなく、学生自ら活動を始
め、組織化する様な努力過程によつて、活動参加への自覚を深

める。

(2) 活動の対象に対して、年齢差による援助技術を体得し、自己の
対象グループ内での立場を比較的客観的に捉える事が容易に出
来る。

II 活動への参加態度

年度毎、きりかわつた学生によつて、異つたタイプをもつて活動
に入るが、何れも踏み出す時には、期待と同時に不安の度合も大で
ある。しかし回を重ね非常に積極的な態度で、地域、対象児童に愛
着をもつてくる。前述の地域に対する不安が、次第に実際の活動の
運び方自体に疑問を持つ様に変化してくるのである。

それらを常に、学生相互に協議しあい、解決への方策として定期
的にあき時間を利用して研究会、連絡会をもっている。子供研究
会として童話、紙芝居の内容分析を試みる会であつたり、講師を招
いて講義、体験談を聞いたりした。又、テキストを用い抄読会形式
にし、実際との関連を検討している。又この学生グループでゲーム
係、童話係、演劇・紙芝居係、歌の係と分担責任をもち、その指導
の仕方について学生個々技術的訓練を試みている。

例えば、ゲーム係の指導の仕方について実演する場合、グループ
メンバーが、その対象児童になりきつて実験台になる。その後、
建設的に批評をしあうのであるが、この段階に至るまでにグループ
メンバー相互に関係がよくなされていなければならない。

まとめ

以上、子供会活動それ自体の地域との結びき更に、その活動に当
る援助学生グループメンバーの動きについて、至極省略して述べて

きた。この活動は、或る些細な一例にすぎないのであるが、大学がその地域との関係を容易に保ち、大学拡張の一端を担う事が出来ると思う。大学側から地域の人々に対する知識の伝達の如き形態になりやすいのが通常であるが、——勿論基本形態となるのであるが——ここに問題なのは、地域の各々のニードのとらえ方なのである。唯表面化したニードを満たす事にとどまらず、よりその潜在的なニードに対して満たしうる活動が、最ものもまれるべきである。前者は、兎角地域との結付に於ては浸透永続する事が比較的少ないのではないだろうか。後者の場合は、たとえ、働きかけの内容が、客観的にみて価値を見出されぬ様に思えるものであつたとしても、その人々に対し参加しているという快感意識を持ち得ると云えよう。この点をとらえるには相当の困難を伴うであらう。

こうした地域との結付過程からみて、大学の立場は、社協とのタイアップによつて地域に根ざした活動が出来てはならないかと思う。同時にその活動に参加する学生の組織化も考慮されなければならない。ここに大学々生（特に社会福祉学科学生に於て）の教育の理論と実践との意義ある生きた課題が展開されて行くのではなからうか。今後、総合大学のある一面の在り方として、各専門学科の実際を大学内で組織化して、それが地域で実つて行かされるべき努力がはらわれてよいだろう。現在種々この様な活動は見られ歴史をもつ運動もあるが、尙、今後の地域への拡張進出のあり方として考えなければならぬと思う。

最後にこの愚筆に接する読者よりの御批判御指導を心より御待ちする次第である。

★ ☆ ★ ☆ ★

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

★ ☆ ★ ☆